金山散策マップ

史跡佐渡金山

道遊の割戸（国指定史跡）

慶長６（1601）年、佐渡金山発見の端緒となった大鉱脈の露頭掘跡。山の中央をＶ字に立ち割った壮大な景観は佐渡金山のシンボルで、壁面にも多くの坑道跡が残る。明治以降は割戸の下部で大規模な採掘が行われた。写真は高任神社の裏側から望む道遊の割戸。

宗太夫坑（国指定史跡）

江戸時代初期に開発された主力間歩（坑道）。鉱山絵巻などをもとに坑内の様子を忠実に再現し、観光坑道として公開している（延長約 280m）。将棋の駒型の小坑道、斜坑、探鉱用の小さな狸穴、空気を取り入れるための煙穴など、江戸期の旧坑で見られる諸条件を備え、斜坑は海面下まで延びている。

南沢疎水坑道（国指定史跡）

坑内の地下水を排水するため、元禄４（1691）年から約５年の歳月をかけ、「たがね」と「つち」の手掘りで開削された延長約 922m、高さ２m超の大型排水坑道。工事の進捗を図るため、途中２箇所に中間立坑を設け、６箇所から同時に掘り進む迎掘という工法が取られた。貫通点の最大誤差は１m以内と、当時の測量技術の高さがうかがえる。坑道は 300 年を経た今も、坑内の湧水を日本海に注ぎ続けている。見学できるのは坑口のみ。

佐渡奉行所（国指定史跡）

佐渡奉行大久保長安が慶長９年（1604）年、相川の町並みを一望できる現在の高台に建てた。宝暦９（1759）年には、町内に散在していた選鉱・製錬工程を一箇所にまとめた寄勝場が建てられ、佐渡の鉱山経営と行政の中心だった。奉行所は６度の火災で焼失と再建を繰り返し、そのたび形を変えている。現在の建物は天保期（1830～1844）の佐渡奉行所絵師、石井文海によって描かれた平面図をもとに平成 12 年に復元されたもの。入場料 500 円。

時鐘楼（国指定史跡）

佐渡奉行所の時報鐘。佐渡奉行萩原重秀の命により、正徳３（1713）年６月６日九ツ時からつき始めたとされる。佐渡奉行の川路聖謨の佐渡在勤日記「島根のすさみ」（天保 12 年）からは、１日を 12 に分け、２時間おきにその時刻の回数だけ鐘がつかれていたことがうかがえる。現在は、付近の住民が持ちまわりで朝夕に鐘を鳴らしている。

京町通り

奉行所と金山を結ぶ江戸時代の繁華街。往時には京都や大阪の呉服商たちの店が軒を連ね、３階建ての家もあったという。毎年６月に開かれる「京町音頭流し宵乃舞」では、ぼんぼりが町並みを幻想的に照らし、三味線と謡を伴った相川音頭の波が通りを優雅に流す。

相川の町名

慶長９（1604）年、佐渡奉行所設置に伴い、本格的な鉱山都市としての町づくりが始まると、奉行所お抱えの金穿りの町である大工町、金銀精錬の町である大床屋町などの職人町や、八百屋町、味噌屋町などの食料品町、弥十郎町などの山師の名をつけた町が誕生した。今も残るそれらの町名は、当時の町並みをしのばせてくれる。京町通り付近には、金山周辺から取れる赤土の焼き物「無名異焼」の町名灯ろうが随所にある。

大久保長安逆修塔（国指定史跡）

佐渡奉行大久保長安が生前、自身の死後の成仏を願い、大安寺に建立した石塔。長安は石見や伊豆の鉱山経営も兼ね、徳川家康からの信望も厚かったが、死後は所領を没収され、一族も処刑された。この石塔だけが破壊を免れ、今も残されている。

河村彦左衛門供養塔（国指定史跡）

河村彦左衛門は上杉氏の佐渡代官として慶長５（1600）年まで佐渡を支配した。上杉氏の会津移封後も佐渡にとどまり金山の開発に携わったが、家康に排斥されて佐渡を去り、慶長 13（1608）年に村上で没した。供養塔は大安寺に安置されている。

大立竪坑

明治２年、政府は佐渡金山を主要鉱山として官営化し、他鉱山に先駆けて近代化に着手した。明治８（1875）年にはドイツ人技術者を招き、日本初の西欧式竪坑（垂直坑道）、大立竪坑を開削する。この竪坑は、東西約３km、南北約 600mに分布する佐渡金山の鉱脈群のほぼ中央に位置し、平成元年の採掘中止まで大動脈として活躍した。最終深度 352m。現在の鉄製やぐらは昭和 13 年の日華事変に伴う金の大増産期に建設されたもの。岩盤内部には、大正７年に米国から輸入し、坑内の動力として使われた空気圧縮機や、昭和 14 年に設置された日立製作所製の巻揚機が残っている。

高任立坑

明治 18 年、当時鉱業界の第一人者だった大島高任が佐渡鉱山局長に就任すると、更なる近代化と大拡張が図られ、近代佐渡鉱山が完成する。この竪坑は明治 19 年に高任が開削を立案、翌20年に起工したもの。後にその功績をたたえ、高任立坑と命名された。最終深度は 659m、海面下 530m。佐渡金山で最も深い垂直坑道。

高任神社

初代佐渡鉱山局長、大島高任を祀った神社。平成元年の採掘中止時までは、その年に取れた最も品位の高い鉱石を奉納していた。

中尾変電所跡

明治 45 年、坑内のポンプや巻揚機を電動化するため、鉱山から約 13 km離れた戸地川流域に戸地第一発電所が建設された。電力は特別高圧線で変電所へ送られ、200Ｖに降圧されて鉱山施設で使われた。この建物は昭和の大増産期に建設されたもの。

搗鉱場跡

品位の低い鉱石を粉砕し、水銀を用いて金を回収する工場。明治 20 年代には、搗鉱機それぞれ 30 杵を備えた第一、第二工場があった。明治 34 年には 200 杵に増設し、１日 200ｔの鉱石を粉砕したとされる。工場は大正 13 年に火災で焼失し、大正 14 年に新設された。現在残っているのは鉱石を貯める鉱倉。

石積アーチ橋

明治期に高任地区との連絡橋として２か所に建設された。下流側の橋の内壁には「佐渡鑛山　卅七年（三十七年）十一月」と記された建設当時の銘板が残っている。

破砕場

昭和 13 年に建設され、平成元年の採掘中止まで使われた。鉱石を上部の建屋から投入し、最下段の建屋内のクラッシャーで直径 15 cm以下に破砕後、ベルトコンベヤーで貯鉱舎に運んだ。

貯鉱舎

昭和 13 年、金の大増産期に建設された鉄筋コンクリート製。容量は 2500ｔ。下底中央に４ｔ鉱車が入り、貯鉱舎から鉱石を抜き取って、電車で北沢地区の選鉱場へ運んだ。

北沢浮遊選鉱場・精錬所跡

佐渡鉱山局長大島高任による第二次近代化の主要工事の一つ。この工事では、北沢から大間港までの約１kmを結ぶ日本初の架空索道が建設されるなど、当時最先端の西欧技術が導入された。昭和 13 年から国を挙げて金の大増産が始まると、佐渡はその中心となり、月間７万ｔの鉱石処理が可能な東洋一の浮遊選鉱場がこの精錬所跡地に建設された。

シックナー

昭和 15 年に完成した直径 50mの大濃縮器。鉱石の精錬過程で出た泥（ズリ）を洗い、水と泥に分離するための施設。

北沢火力発電所

佐渡で初の火力発電所。500kw のスチームタービン１基が設置された。その運転開始により、製錬所の蒸気機関が廃止され、電動機に替わった。昭和 13 年の大増産工事では 1800kw に増強されている。

インクライン

大間港に陸揚げされた石炭を北沢火力発電所に供給するための傾斜鉄道。現在は巻き上げのレールが取り外され、レールを固定していたアンカーボルトが残っている。

御料局佐渡支庁跡（国指定史跡）

明治維新後、政府直轄鉱山となった佐渡鉱山は、工部省の下で近代化を遂げ、大蔵省、宮内省へと所管が変わり、明治 29 年に三菱合資会社へ払い下げとなった。これは宮内省御料局時代の建物。現在は金山資料を展示した博物館になっている。入場料 300 円。

大間港

佐渡鉱山局長大島高任が、鉱石や資材運搬のために建設。北沢製錬所の敷地造成で出た土砂を日本初の架空索道で運び、埋め立てた。コンクリート使用以前の、石灰をたたいて固める「たたき工法」による護岸や、1.2ｔクレーンの土台、レンガ倉庫などが残る。

上相川

1600 年代初め、佐渡金山発見初期に栄えた山中の鉱山町跡（約 20 万㎡）。慶安５年の記録によれば、22 町に 513 軒の家があった。往時は「上相川千軒」と称されるほど繁栄し、鉱山から製錬工場までを備えていた。佐渡奉行大久保長安により、奉行所を中心とした都市形成が進むと、船で安く大量に物資が運べる海岸部へと町は広がり、上相川は衰退した。鉱石の破砕に使った石臼や、石垣による宅地・水路跡などが残り、先人の足跡を伝えている。

火薬庫

火薬を使う採鉱は英国人技師ガワーによって伝えられたとされ、明治元年に火薬採掘が行われた記録が残る。火薬庫は何箇所もあったとされるが、この建物は上相川の床屋町、鍛冶町、田町の住居跡上方にあり、土塁で囲まれた窪地に５棟が２列に並んで建っている。

大　間　港

浮遊選鉱場・精錬所跡

シックナー

搗　鉱　場　跡

大立竪坑から望む道遊の割戸

大立竪坑・空気圧縮機

大　立　竪　坑

火　力　発　電　所

時　鐘　楼

京　町　通　り

石積アーチ橋

貯　鉱　舎

破　砕　場

高　任　立　坑